

プロローグ

五月二十日、午前三時二十二分。夜明けにはまだ間がある。

東京湾に臨む工業団地は冷え冷えとした眠りに沈んでいた。目覚めているのは点在する各工場の守衛の詰所、工場の建屋の赤い非常灯と、鉄の町の歩哨のように夜空を突いて立つクレーンのライト、そして星だけである。湾を横切つて羽田に向かう航空機も、この時刻には絶えている。

だから、この町の路上の一角で突然炎が上がったとき、それを最初に見つけたのは人間ではなかった。火の手が上がった、今は使用されていない搬入用道路に隣接する倉庫の火災報知器が鳴り始め、眠る鉄鋼の揺りかごの番人たちを叩き起こしたのだった。

しかし、何が起こっているのかを認識したのは、人間だった。

駆けつけた守衛の一人は、今年五十六歳だった。定年退職後の再就職で、ここの守衛は易しい仕事だった。体力的にも、精神的にも。昼間は郵便物の管理と来客の案内、そして夜勤といつても構内の見回りだけだ。夜間操業の工場のセキュリティ・システムは、すでに何年も前から人間の五感を必要としなくなっていた。

炎は歪んだ円形を描いて燃えていたが、倉庫の壁にかけのぼった火はおさまり、醜いしみのようなあとが残っているだけだ。炎は高さを失い、地を這っている。それも円形の縁を越えて燃え広がることはなかった。聖なる印のなかに封じ込まれた魔物のように、ふくらんだりしぼんだりしながらも、そこから出てくることはなかった。もともとこの路上には、燃えるものなど何もないのだ。

その円の中心に、黒いものがねじくられて横たわっていた。

「なんてこった」

息を切らしてうめく守衛のまえで、その黒いものは手を出した。足が見えた。炎の勢いで向きがかわり、頭のあるところが見えた。

湾を渡ってくる海風に混じって、熱気とガソリンの匂いが吹きつけてきた。守衛はせきこみ、目に涙がにじむのを感じた。

「ひでえや……」

遅れてきた同僚がつぶやいた。火災報知器が止まった。出し抜けに静寂が戻り、自分たちの荒い息づかいと炎の音だけが残った。

若い同僚が後ろを向いて吐き始めるのを耳にしながら、守衛はふと、半歩まえに進み出た。まばたきした。

何かが違う。

彼は戦争を知っていた。いや、徴兵されなかったから、正確に戦争を知っているとは言えないかもしれない。しかし、空襲は知っている。生身の人間の燃える匂いは知っている。

そのとき、燃えるもの全てを公平に焼き尽くそうとする炎の意思で、黒いものの向きが、また変わった。

守衛はそこに、とうてい信じられないものを見た。不似合で、とっぴで、数瞬の後、彼は笑いだしていた。両手を膝につき、体を折り曲げて笑いだしていた。

「だ……大丈夫ですか」

袖で口を拭い、青ざめた顔を熱気にあぶられながら、同僚が近づいてきて彼の背に手を当てるのを感じた。彼があまりにも笑うので、気味悪そうにその手を引っ込めるのも分かった。

「大丈夫だよ」

笑いを抑えようと息を整えながら、彼は答えた。遠くからパトカーのサイレンが近づいてくる。

ねじくれた黒いものは、星ののぞく夜空に助けを求めるかのように手を上げ、なおも燃え続けていた。

第一章 マサは語る

1

加代ちゃん^{かよ}は、一人で来たことを後悔し始めているらしい。

いつもなら、必ず誰かとコンビを組んで行動する。今日はたまたま、ほかの調査員たちが出払っているところへの飛び込みの依頼だったので、仕方なかったのだ。

それにしても、俺は少しばかり情けなく思っていた。いつもなら、俺がそばについているかぎり、この程度の荒れ具合の盛り場など怖いうちにも入らないはずの加代ちゃんである。

いったいなんだって俺は、爪の間に刺^{とげ}をたてたりしたのだろう。それも、切開して一週間も入院しなければならぬほど深くに。おまけに、入院中には、大嫌いなノミとりの風呂に入られて、すっかり薬くさくさくなってしまった。退院したとはいえまだちょっと足取りがおぼつかないところに、薬用石鹼^{せっけん}の匂いがプンプンしている番犬じゃ、加代ちゃんが心細く感じたとしても、無理はないかもしれない。

俺も歳をとっちゃまったのかなと思う。入院している間、いやにしばしば、昔、警察犬として

ならしたころの夢を見たのも、じじむさくなってきた証拠なのかもしれない。

俺の名前はマサ。警察をやめ、蓮見探偵事務所にひきとられてきたとき、加代ちゃんと妹の糸ちゃんがつけてくれた名前だ。気に入っている。だから、俺を見かけたらその名で呼んでほしい。

調査員として働く加代ちゃんのお供をして歩くのが、今の俺の仕事だ。弁解するわけではないが、いつもなら、もうちよつとさっそうとしているのだよ。

加代ちゃんは、必要以上に強く、俺を繋いだ革紐を引っ張って歩いていく。探しているのは、「ラ・シーナ」の看板だ。できるだけ道の右側を歩くように心がけていたが、時々、山積みされたゴミ缶やビール瓶のケースをよけて歩くために、真ん中によるめきでなければならなかった。そのたびに俺も、よちよちと後に続く。まったく、ふがいないながめだ。

おまけに今日の加代ちゃんは、おろしたての靴を履いている。雨が降っているわけでもないのに、どうしてこの横町はこんなにじめじめしているのだろう。加代ちゃんはどうして、新しい靴を履いていきたいという気持を抑えられなかったのだろう。人間というのは、どうして新しい靴を履くと靴ずれなんて厄介なものをこさえるのだろう。

おかもちを下げたラーメン屋の出前持ちが、いつそアクロバットを言いたいようなスピードで、弧を描きながらきわどく俺たちをよけて通った。ラーメン屋には楽しいデモンストレーションなのだろうが、加代ちゃんは小さく悲鳴をあげて飛び退いた。

退いたところが、最悪だった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。